ランドスケープから“2025 大阪・関西万博”への提案…いのち輝く未来社会の実験島
報告会（第２部パネルディスカッション）記録

≪概要≫

日時：2018 年 11 月 9 日（金）13：30～16：30

場所：大阪市歴史博物館 講堂（4 階）

パネルディスカッション

パネラー：宮﨑 政雄氏（大阪府都市整備部鳳土木事務所都市みどり課 主査、
大阪府都市整備部討論式研修『No Green No Life』班）

西辻 俊明氏（(一社）ランドスケープコンサルタンツ協会関西支部 支部長、
㈱現代ランドスケープ代表取締役、技術士、RLA）

笠松 滋久氏（国際造園研究センター、(一社）街路樹診断協会 副会長、
㈱東邦レオホールディングス取締役、樹木医）

コメンテーター：今西 純一氏（大阪府立大学生命環境科学研究科緑地環境科学分野 准教授）

松田 麻里氏（(一社）ランドスケープコンサルタンツ協会関西支部、
㈱総合計画機構 環境計画室長、1 級造園施工管理技士）

コーディネーター：糸谷 正俊氏（公園管理運営士会 会長、(一社）公園からの健康づくりネット 理事長）

（進行役：大槻 憲章氏（NPO 国際造園研究センター　常務理事）

≪記録≫

糸谷：報告を聞いての質問や意見はあとで伺いたい。まず、今西先生に今日初めて提案を聞かれて、どういう感想をもたれたかお聞きしたい。

今西：手弁当でできているとは思えない隙のない素晴らしい提案だと思う。普段接している学生とのギャップを改めて感じる。プロの提案であり、ここがダメというところがない。万博開催地に大阪が選ばれた際に、さらにこれをつめていけばと思ったことをいくつか挙げる。

コンセプトの中で、日本人の自然観や畏敬の念という話があったが、空間としてどう造り込んでいくかが大きな課題だと思う。夢洲は人工島であり、樹木の健全を保つのは難しい。畏敬の念を持って育てられた木は、立派な木になる。ここでそれが実現できればすごいと思う。

畏敬の念で言うと石という素材を忘れてはいけない。今回石の話があまりなかったが、海外と比べて日本は石への思い入れが違う。日本人は石に神を感じる。石の扱いを人工島でも活かせるといい。

周辺の海との繋がりを意識すると、風景として繋がってくる。海の雄大さを感じられるデザインがあるといいと思った。

基盤整備は重要だと思うが、ないがしろにされているのが現実である。植栽基盤の重要性の大事さを訴えてほしい。日本人の自然観としても大事である。提案にもあった苗木から育てることも重要である。７年でできるかは分からないが、DNA レベルで地域性のある植物を活かしていき、地域に根付いたランドスケープになるといいと思う。年月が経てば、人工島は自然の島になっていく。

夏の暑さ対策も重要である。大きな木の存在が重要だと思う。

課題としては、世の中の流れで考えると、多様な人が関わることが大事だと思う。女性、マイノリティ、病気の方などに参加してもらえるといい。IT 技術を使って参加してもらうのもいい。ランドスケープを作る中で、関わってもらえる仕組みがあるとよりよくなる。

もう一つは、日本のランドスケープとして職人の技術も大きな要素である。単に風景だけでなく、日頃の管理技術を見せるのも一つのアイデアである。以前、オランダの整形式庭園を見に行った時も、トピアリー形成の様子を興味深く見た。海外の人にとって、日本人のハサミを使った剪定は魅力的だと思う。

最近、健康との結びつきができるようになっている。最新のアップルウォッチでは、心拍数で健康状態を測る機能がある。うまく使えば、参加者が健康を管理しつつ、楽しんでもらえる仕組みが作れる。IT の活用にもなる。

糸谷：大変勉強になる意見ありがとうございます。特に石の扱いについては、日本のランドスケープづくりに欠かせないものであり、ご指摘いただきありがとうございます。多様な参加も、来場者との交流にも繋がる。大阪万博でもこの考え方を取り入れることは、SDGs の実現にも大事である。

何度か研究会に参加していた松田氏にプランナーとしての意見が欲しい。女性、府民の立場でのコメントもよろしくお願いしたい。最近シンガポールに行かれたと聞いているので、その視点でも何かあれば、コメントをお願いしたい。

松田：第 1 部の感想だが、大阪万博と言えば 1970 年の大阪万博をイメージされると思うが、この時の万博は大阪が発展していく中で開催されたものである。今回の提案は、少子高齢化が進み、自然環境への配慮や心身の健康づくりなど、現在のライフスタイルに対応した、熟成した日本、大阪の万博としてふさわしい案だと思う。

シンガポールについて少し話したい。シンガポールは、最近はシティ・イン・ア・ガーデン、つまり庭園のような緑あふれる都市を打ち出して、対外的に魅力的なイメージを発信している。屋上にプールがあるので有名なマリーナベイ・サンズホテルの周辺にも緑が多く、夜間にはスーパーツリーのライトアップが楽しめる。この電力は太陽光発電システムが活用されており、潅水も雨水を利用しており、環境に配慮されている。また街中に緑が多いが、シンガポールでは特に 20～50m の緑に力を入れられているが、日本は農耕民族のせいか、地面など目線の下に力を入れているように思われ、先ほどのパビリオンを地下にするという案も日本的だと思う。マーライオンもそうであるが、シンガポールは風水の影響を強く受けている。一番のパワースポットとして「富の泉」があるが、風水では水は財力を示し、これに触れると願いが叶うと言われている。この「富の泉」はシンガポールのビル街にあるが、これは以前海であった場所を埋め立てたことで運気が悪くなったため風水の先生に相談して改善したということである。このように町のあり方に、シンガポール市民の宗教観、信仰がみられる。日本は八百万の神様や、海、川、土などを神聖視しているところがあり、そういった日本、関西、大阪らしさとしてこの万博に反映していただければと思う。

これに関連して、会場をつくる際にも、周辺住民や府民、国民が関われる仕組みがあればいいと思う。また、跡地についてであるが、万博会場は期間の後は大阪のまちの一部になることもあり、今後どう考えていくかも重要であると考える。

糸谷：1970 年の大阪万博は跡地利用が早く決まらなかった。最終的に会場計画は丹下健三氏の案になったが、それまで京都大学グループの案などもあり、紆余曲折した。できれば早く跡地利用を考える

のが大事であるが、まずは招致であり、今回は会場づくりの話を優先にした。
宮崎氏からは、報告会を聞いて、他のパネラーとの意見のすり合わせやコメンテーターに対してのコメントがあればよろしくお願いしたい。

宮崎：大阪府で造園職を 15 年ほど経験している。府では、研修は自由にできる制度があり、独自で研修をしていた。私もシンガポールに行って感じたことは多い。東京の大学出身だが、大阪の緑をどう増やしていくかを課題と感じていた。シンガポールは建物、川などいたるところに緑がある。シンガポールに２回目に行った時に、日本でできるのかという違和感があり、万博の手本にするのは無理かと思った。里山やフットパスの研究をしていたこともあり、熱帯の緑ではなく、人が手入れしていることに美しさがあるということに結びついてきた。自然との共生が日本では重要である。シンガポールはすごいと思うので、学ぶべきところは取り入れたい。
今西先生のマイノリティの意見は大事なことだと思う。造園もマイノリティである。都市整備部が約 1,000 人にいるのに対して、造園職は 50、60 人しかいない。自然を理解して、伝えていく立場として、他の分野の人と広く連携するのが大事だと思う。万博推進室に対しても何か協力し、提案したい。
台風の倒木の話だが、基盤は疎かになっていると思う。鳳土木事務所の管内でも 20m 級のケヤキが倒木し、100 本ほどの樹木が道路を塞いだ。基盤の脆さを感じる。基盤の管理もしっかりしないといけないと思う。今日の提案の技術を導入できたらいいと思う。

糸谷：西辻氏の「会場全体が博覧会。帰りにパビリオンを見ていこうか。」という発言が印象的だった。

西辻：パビリオンがどれだけ感動できるかあまり期待できない。ランドスケープの素晴らしさは、これから築き上げていかないといけない。維持管理が大事という話はよく聞くが、台風 21 号の被害で現実を目の当たりにした。一般の人も見ている。そろそろ基盤があってこその緑であることを理解されてほしい。緑があってこそ人の暮らしがある。このように思っているが、具体化したことがないので、今回実験できるチャンスである。ランドスケープは、少数精鋭である。社会を変える勢いで、全員が協力してできることがある。他分野や市民も参加して、苗木の緑化や泉南の自然を持ってこれるような活動をしていけばよい。石の話には感銘を受けた。あまり考えられていなかった。庭園技術という言い方ではなく、広く理解しやすいスマートな言い方がよい。風景、土、水も持続的な空間を創れるのが我々だと思う。

糸谷：続いて、笠松氏お願いします。

笠松：石の話は抜けていた視点であり、感銘を受けた。健康との結びつきも研究会でも話題にあがった。健康とランドスケープは、これから重要なキーワードになると思う。医療費や保険料の問題、健康寿命の延長など、日本はリードしないといけない。健康には「歩く」ことが大事だという。ランドスケープとして、街中を歩ける、あるいは会場を歩ける環境づくりを進めるのがいい。セグウェイより歩いて気持ちいい町「大阪」にするのが、健康に繋がる。これはランドスケープの力だと思う。これから実現していく。大阪万博が誘致できたら、世にランドスケープを発信したい。会場での剪定の話だが、透かし剪定も風の影響を軽減し、倒木対策になる。海外にない日本古来の技術であり、世界に誇れることを発信できたらと思う。

糸谷：健康は 2025 年万博の大きなテーマであることは間違いないと思う。ここで会場から意見、質問がほしい。研究会に参加した方でなく、初めて聞いた人にお願いしたい。

中村哲治（東邦レオ）:「実験島」という話があったが、少数派であるランドスケープとしてできることは何か。夢洲は大阪の一部になる。跡地利用をどうするかという話が頭に残った。万博跡地が愛され、賑わいがある町になると、不動産の価値が上がり、固定資産税による税収も上がる。民間を呼び込んでの官民連携の仕組みが大事だと思う。基盤が大事であるなら、どうグリーンインフラを導入していくか。プロセスの中で多様な参加を、どう町の中に取り入れていくか。どういう仕組みをもって、グリーンインフラやエリアマネジメントを取り入れるべきか考える必要がある。

糸谷：官民連携でこれからの万博後のまちづくりをどう考えるかという質問である。

西辻：気になっていることを質問してくれて嬉しく思う。参加型のまちづくりについて、ランドスケープでは公園を中心にするため、スケールが小さい。市民の声を聞いている立場で言うと、可能性があると思う。うまくいった例とそうでない例の違いは、将来像をはじめに共有できているかどうかで変わると感じている。今回は大きなプロジェクトだが、人工島の将来像を分かりやすくアピールして、賛同できる人には肥料や苗木を 1 ㎥や 1 本でも植栽してもらえれば、お金ではなく体で手伝ってもらえる。子どもや孫にバトンパスできるシステムだといいと思う。基盤づくりは造成であり、市民には難しい。できれば専門家だけに連携の範囲を絞り、質を担保して、先ほどの方法を進めればいい。

宮崎：大阪府では、市民協働を「笑働」として、府民と笑い合いながらできる活動を進めている。和泉市で槙尾川ダムの建設計画があった場所を「笑働の森」として、森づくりを進めている。大学生も参加している。環境意識の醸成にも繋がっている。

今回の提案は、集客装置になると思う。緑を管理するにもお金がない。万博で稼いで、管理費を充てる循環ができればいいと思う。

西辻：民間の力をどう取り入れるかが大事である。企業については、今アウトドア産業が右肩上がりである。ランドスケープとして、貢献の場になることをアピールしたい。接点づくりとして、アウトドアの空間をうまく使えればいい。環境づくりもそうだが、掘り下げ方をうまくするなど、その辺の方向性を狙うといいと思う。

木田幸男（東邦レオ）：1 点今西先生に伺いたい。地元の木の話だが、関西での地元の木について一度考えたい。東京ではムクノキやクスノキ、センダンの実生を普通に見られるようになっている。北限があがっている。100 年島が続くなら、地元の木とは何かと思う。難波宮跡にシュロの木があるが、元々南国の木である。もう 1 点は、埋立地できれいな植栽を見たことがない。建物の影はいいが、そうでないところは風が強い。西辻氏の提案の絵の中に 10m ぐらいのクスノキがあるが、実際にできるのかと思う。風を考えると、低木から高木にしていく方がいいと思う。風への対応はどうするのか。

今西：地元の木について、温暖化の影響で北限が北上しているという変化はあると思う。何が地元の木かどうかは曖昧に思っていいが、重要なのはその地域や環境に適応しているかということである。地元という言葉に意味を込めたのは、DNA レベルで同じものにしてはどうかということ。例えば、アラカシは九州産が多いが、関西産を使ってはどうかと思う。

笠松：答えにくい質問である。埋立地の幕張でも海近くのクスノキは、潮風の影響で樹形が乱れている。

１つ言えるのは、基盤によってかなりましにできるということである。東日本大震災で津波が押し寄せたにも関わらず森が残っているところがある。こういう森は有効土壌層の厚さが違う。森の背

後にある住宅は残っている。基盤でも改善することができる。風の逃がし方として、低木から高木にするという方法もあるが、白砂青松となる松原を植栽して、丘も使いながら風を上に逃がす風の道を考えるのがいいと思う。

糸谷：1970 年の大阪万博は、都市計画公園に決定されて、跡地が公園となった。今回の提案が万博協会に評価されて、会場を都市計画公園にしてはどうか。民間利用もありながら、緑の基盤の重要性を訴えていきたい。

石原憲一郎（兵庫県）：質問というより感想だが、私も大阪花博や淡路花博に関わって議論した経験があり、この経験は財産になっている。地球レベルで考えると人口が増加している。水や食料の確保が課題となっている。また、南海トラフ地震が起こると言われている中で、地盤の弱い人工島ですので、島の安全性の担保も必要である。六甲アイランドも関西空港も台風 21 号で被害にあった。地球規模で、島で開催する意味を真剣に考える必要がある。ランドスケープの範囲について、動物を含めた生物の視点もいる。建築についてもランドスケープからもう少し言及していいと思う。ある程度の枠組みとして、建築や土地利用の枠組みをランドスケープで考えていいと思う。ソサエティーやデジタルとの関係について、どうマッチングしていくかも今回のチャレンジとなる。実験できたらいいと思う。世界的にはパリ万博ほど実験できている万博はない。大阪花博や淡路花博ではコミュニティの形成を謳っていたが、今どうなっているかということもある。会場跡地利用も含めて考える必要がある。

糸谷：私も同じようなことを考えている。

最後に登壇者から全体の感想をお願いする。

松田：最初にこの研究会で大阪万博の立地場所を聞いた時、愛知万博のような既存の森があるわけでもなく大変不利だと思ったが、この研究会を通して、この場所は「実験島」であり、何もないからこそ実験できるとわかった。ソフト面でも官民連携のプラットフォームの場所になり得ると思う。2025 年万博が決まったら、私たちも何らかの形で関わり、盛り立てたい。

今西：今日は大変勉強になった。IR 誘致が来るということで、IR と絡めてのランドスケープのメンテナンスをすると、質の高いランドスケープを提供できるだろう。歩いて気持ちいいまちづくりやデジタルの活用について、AI 技術が向上しているので、混雑度や風の強さなどで、今日のおすすめの散歩道を提案してくれるアプリがあると面白いと思う。

笠松：２週間前に中国の青島にある 50km² ほどの埋立地に行った。鉄道の橋梁などインフラ工事が進んでいた。平坦な台地で緑が一切なく、1 日いてると耐えられないと思った。定量化しようという考え方でなく、感性的なことも大切にしたいと思う。GAFA（Google、Apple、Facebook、Amazon）の企業の新社屋は、ほぼ緑に囲まれたところにある。デジタルが増えれば、緑が大事になっていくだろう。万博で発信できていければと思う。

西辻：どう分かるようにするかにポイントがあると思う。ランドスケープは、安全、美しい、楽しいという分かりやすい価値を提供できる分野だと思う。ランドスケープのデザイン性や技術を発揮できたら、人が来て、喜びに繋がる。実体化は難しいので、今回はいい実験場である。

宮崎：万博を機に繋がりが生まれる。ランドスケープ界の素晴らしさを感じた。提案の話の中で今できることを少しずつでもできればと思う。産官学でできていけたらいい。万博だけでなく、大阪の魅力的なみどりづくりに協力してほしい。

糸谷：今回はランドスケープ界からの提案の場であり、その提案をパネルディスカッションでより立体的なものにしたつもりだ。大阪万博への熱い思いは感じられたでしょうか。（会場拍手）

８月に勉強会の場でも話をしたが、かつて万博は世界の勢力の縮図だった。その中で未来社会への道標の役割もあった。国際的な問題として格差、貧困、飢餓、差別などがあるが、国際的な支援が届いていない。世界の大国は選挙に勝つことや経済戦争ばかりに目が向いており、地球に優しさが足りなくなっている。大阪がなぜ万博を開くのか。これを説明しないと国民や府民への理解は得られないと不安に思う。コンセプトのバイオフィリアは、会場だけでなく、博覧会のテーマになると思う。自然再生の提案は素晴らしい。未来への思想や哲学があり、日本人の自然観に根差したものである。会場づくりにバイオフィリックデザインの考え方を取り入れることで、会場そのものが万博のシンボルだと評価されるようになる。技術的根拠もあり、考え方からイメージ、技術展開まで示している今回の提案は、ランドスケープの真骨頂を示せたと思う。多様な参加があるとよりよくなる。私の個人的意見だが、世界に開けているが独立しているという「緑の出島」というコンセプトもある。温暖化で沈む島や困っている国へのメッセージになると思う。2025 年万博がもし決まれば、今回までは応援団、マイノリティだが、これから万博をよりよくしていく主要メンバーの一員として万博づくりに参加できることを期待したい。

進行役：この勉強会は、大阪で３度目の万博が開催できるかどうか、未定の段階で行いました。

大阪での開催が決まらなければすっと消えてしまう話かも分かりませんが、開催が決定すれば、多くの巨大な組織が一度に動き出して、造園界の話などは飛んでしまうでしょう。

しかし、酷暑の夏と強い台風が来るかもしれない大阪の地で博覧会を行わなければなりません。いくら現地に太陽光発電があると言っても、電気の力だけで会場全体を冷やすことは不可能です。その点で今回の提案は、避けて通れない方向を示していると信じます。

万博は無くなっても IR など夢洲の土地利用は必要です。夢洲の将来、ライバルで先進地のシンガポールに勝る空間をつくる場合にも緑はより重要になるでしょうし、土地利用の如何に関わらず、夢洲だけでなく大阪の価値を高めるためには緑とランドスケープは欠かせません。

私は以前の仕事の関係で、BIE の事務総長と次長と何度か食事をさせていただいたことがあります。当時は未だパリが手を挙げていた頃ですが、大阪について、「大阪は 2 度の万博を大成功させている。1970 年の万博から半世紀、今の日本がどのようなことを世界に発信するのかには非常に興味がある」とおっしゃっていました。

開催地の決定はすべての BIE 加盟国の投票で行われます。お二人の思いだけでは無理ですが、今の段階では大阪が選ばれることを期待して本日の報告会を閉会いたします。ありがとうございました。

以　上